

INTERVIEW

●国立大学法人和歌山大学
学長

山本 健慈 氏

●山本 健慈氏

昭和 52 年 3 月 京都大学大学院教育学研究科（博士課程）
単位取得退学
昭和 52 年 4 月 和歌山大学教育学部助手
昭和 53 年 4 月 和歌山大学教育学部講師
昭和 56 年 4 月 和歌山大学教育学部助教授
平成 7 年 4 月 和歌山大学教育学部教授
平成 10 年 4 月 和歌山大学生涯学習教育研究センター教授
和歌山大学生涯学習教育研究センター長
（平成 20 年 3 月まで）
平成 16 年 4 月 和歌山大学評議員（平成 21 年 3 月まで）
平成 19 年 4 月 和歌山大学副学長（平成 21 年 7 月 31 日まで）
平成 19 年 10 月 和歌山大学サテライト部長（平成 21 年 3 月まで）
平成 20 年 4 月 和歌山大学教育学部教授
平成 21 年 8 月 和歌山大学学長



インタビュー

学生・教職員協働で、地域を支え、 地域に支えられる大学を目指す

今夏、国立大学法人和歌山大学の新学長に山本氏が就任されました。今回は、長年「地域生涯学習」「子育て支援」等について研究を重ねてこられてきた山本氏の新学長としての抱負や、今後の大学運営などについてお話をお伺いしました。

<聞き手は、弊行取締役経営企画本部長 成田 幸夫>

大学規模の小さいことがメリットに

— 最初に学長に就任された現在の心境をお聞かせください。

山本 国立大学が法人化され、法人としての経営をしていくというのは、複雑で非常に厳しい事態です。そんな中で大きな使命を担いましたので、私自身、覚悟を決めて向かわないといけないとい

う思いがしています。また、私が大学に入学し、研究者として過ごしてきた 40 年余り。自分なりに、自分の人生を思う存分過ごしてこられたのも、多くの人達に支えられてきたお陰だと思えます。だからこそ、今回の学長就任はその恩返しという思いもまた大きく、今は覚悟と恩返しの気持ちで一杯といった心境です。

— それでは、今後どのような和歌山大学を構築されるのか伺っていきたくと思いますが、その前に和歌山大学の強みや特徴についてお聞かせください。

山本 まず本学を含め、現在の国立大学法人全般の状況は財政が縮減されています。しかしその反面、大学の使命はどんどん高まっています。縮減される財政のもとで、拡大する使命にどう応え

るかということが各国立大学法人の大きな課題となっています。この状況下で本学の強みはというと、他大学との比較の問題になるかもしれませんが、私は規模が小さいということだと思います。

規模が小さいということは、私を始め理事である経営者と先生方との距離が近く、先生と学生の距離も近くなります。また、大学と地域社会との距離もとても近いので、それぞれが、今何が必要なのか、何を意欲的に活動していけるのかが、お互いとても分かりやすい状況にあります。

教員も職員も学生も、一人一人が自分の人生をこの大学にコミットしてよかったと思ってもらえないと、外部からも高い評価を得ることはできません。実は、規模が小さいからこそ、この大学で働いてよかったとか、学んでよかったと思える状況が作りやすくなります。後でお話しますが、本学は規模が小さいとはいうものの大学にとって不可欠な要素が欠けていることはなく、むしろ大体そろっているのです。

－ それでは具体的な運営の仕方についてお聞かせください。

山本 私が掲げている言葉に「協働」があります。「自主・自律・共生の気風にあふれる大学」の実現を目指し、大学づくりへの学生の参加をうながしています。本学は経営者から学生までの距離が近いので、良いことはもとより、トラブルなどの悪いこともすぐにわかりますから、これらの問題をみんなで一緒に解決していく組織づくりができます。やはり、みんなが一つの目標に向かって、主体的に自分が生きるということと大学が組織として発展するということを重ね合わせていくということが一番重要なことだと思います。

人間はみんな、よりよく生きたいものです。それは人から押し付けられるのではなく、自分が意欲的になれるものといかにコミットしているか、どれだけ重なり合うかということだと思います。

それはもちろん先生同士であったり、教員と職員であったりといった、人と人のいろいろな関わりで生まれます。街づくりや大学づくりなど組織づくりというのは「人間関係の集積」だと私は思います。「人間関係の集積」というのは「自己紹介の集積」であると私はよく言っています。「あなたが何者で、私が何者である」という、お互いのことをよく知るといことは、お互いを活かすことになるのです。そういう意味でも、本学のスケールが小さいということが、お互いをよく知り合うことができるというメリットになるのです。

－ 2008年4月に観光学部が新設されましたが、各学部の特徴などについてお聞かせください。

山本 本学は4学部からなっていますが、今の時代からみても大学に必要な学部が基本的にそろっています。まず教育学部についてお話します。教育学者である私の解釈からすると、「ヒト」という動物として生まれたものが、歴史や文化の蓄積を踏まえ成長していき「人間」になる。そして初めて社会ができます。「教育」というのは、この「人間」になるプロセスの支援だと思います。ところが、今は「ヒト」から「人間」になるプロセスが非常に困難になっています。なかなか人間になれないというか、月に行く能力はあるけれど多発するトラブルに対して、人間として解決する能力には大きな問題があるように思います。「ヒト」が「人間」になるプロセスを「教育」という言葉に置き換えてみると、教育をどうするかということが非常に重要な問題になっていることがわかります。そのために教育学部では教員の養成というレベルの話だけではなく、「ヒト」が「人間」になるプロセスをどのように研究し、どのような仕組みが必要なのかということを科学する、つまり研究することを重視することが必要でしょう。

次に経済学部ですが、今、世界の経済システム

がいかに危ういかということが、ある意味露呈されています。そして、経済の破綻についていろいろな理屈で説明されています。しかし、これからの経済社会のあるべき姿を探るためには、まずは今までのことを全て疑い、いかに組み立て直すかということに正面から取り組むことが必要です。経済学部では、個別の細かい問題だけに囚われることなく、世界が抱えている根本問題を、本当に人間らしい経済社会とはどういうことなのかということの研究することが重要だと考えています。

さて、システム工学部についてですが、21世紀の産業や技術というのは、重厚長大なものではなく、むしろソフトで柔らかい技術をどう開発するかということだと思います。ですから従来の工学部とは違い、システム工学部という名前に象徴されるように、21世紀にふさわしい技術、あるいはその技術の応用としてのものをどういうふうに作り出すかということを主眼に置いています。

最後に観光学部についてですが、「ヒト」の問題については教育学部があり、経済のシステムについて新しい模索をするのが経済学部、そしてソフトな技術を開発するシステム工学部があります。では、それらが日常生活の問題となったときに、成熟社会という新しい生活水準の中で、どんなことがライフスタイルとして意味を持つのかをトータルに研究するところとは考えると、それが観光学部になると思います。具体的に観光経営をどうするかということも一つにはありますが、まず観光のフィールドである地域やロケーションはどうあるべきか、或いは新しい時代のライフスタイルを支える哲学のようなものを基礎にした観光について、どう捉えるのかといったことを研究する役割と、それを考えられる人材を輩出していくということが観光学部に求められていると思います。そして、熊野や高野山の多くの歴史的な遺産を支えてきた文化や人々が息づいている地域である和歌山の特性を生かし、学問的に大学で探究しつつ、地域の中で交流しながら新しい観光学を創り出す

具体的な方法を、これから考えていかなければいけないと思っています。そして、2011年には観光学部の大学院を設立させたいと考えています。

— **それでは、最近の大学生の気質や今後どんな風に育ってほしいかといったことについてお聞かせください。**

山本 今の学生は、大学に入るまでの18年間に形成されるべき人間形成上の諸課題をそのまま持ち越して入ってきている学生も多いといえます。先ほどの教育学部の説明時にもお話しましたが、限られた情報を処理して試験を通ることはできるけれど、人間としての成熟度は非常に未熟だといえます。人間関係が上手く取れないとか、人と上手く喋れないとか、或いは人と付き合えないといった問題を抱えている学生もいます。かつては普通に18年間生きていれば自然に身に付いていたようなことが、今ではもう身に付けられなくなってしまっています。それは彼らが悪いのではなく親が悪いのでもなくて、社会そのものが人と付き合い合なくても問題なく暮らせるという生活スタイルになってしまった結果だと思います。ある意味、時代が生み出した青年たち、時代の教育システムが生み出した青年たちだといえます。ですから、人間としての成熟度というか、自分を理解し、他者を理解し、自他の関係が作れる。そして物事を共同で解決できる、そういう人間に学生には育ってほしいと思っています。今後、機会があるごとに学生たちに「自己意識を持って、自分自身のことも、他者のこともよく理解し、そのうえで自他が共存できる、そういうことを含んだ人間関係を作れる人間になってほしい」というメッセージを発信していきたいと思っています。

— **学生に対しての具体的な対応などはあるのでしょうか。**

山本 学生のことを考えるには、彼らを支える先生方のことをまず考えなければなりません。これまでの大学というのは、授業はもちろんのこと、学生との対応まで先生がそれぞれ独自の考えのもとに行ってきました。先生同士の交流もほとんどないので、先生が一人で様々な悩みを抱えることになってしまいました。そこで、まず最前線で先生方が行われている、いろいろな試みや努力をすくい上げて、とにかく交流をはかることにしました。既に、私の学長就任が決まった時から始めているのですが、学部長さんたちに集まってもらい学部で起こっている様々な問題や対応策について繰り返し議論を重ねています。

研究者というのにはある意味、自分自身を振り返ることよりも外の業績を追い掛けてきた人で、何より優等生の典型みたいなどころがあります。けれども様々な議論をする中で、先生自身も研究者としてはよくても、教育者としてはどうだろうかといったように疑問を持ち、自分を振り返ることが必要じゃないかという意見もできるようになりました。来年には先生方の様々な努力の成果を交流するような研究集会を学内で開こうと計画を進めています。

また、大学を別の見方から考えると、青年たちが成長してきた 18 年間の様々な情報がストックされているところだといえます。これらの情報は学生個人の問題としてではなく、社会構造の問題として捉えると、現在の教育システムの是非に多大な影響を与えるものだと思います。だからこそ大学だけで仕舞い込むことなく、公開し、多くの人に考えてもらうことができるように発信していく責任が大学にはあるのではないかと考えています。

さて、学生たちへの具体的なアプローチですが、入学時に「大学ではどんなことを学びたいのか。どんな方向性を持って学びたいのか」という目標を先生と一緒に考えてカルテやチャートのようなものを作る試みが学部レベルで始まっています。

4年間を通して定期的に両者で確認しながら、先生が学生の面倒を見ていく仕組みを作ろうということです。そこから学生たちが抱えているいろいろな問題を、一から見直していくプロセスも見られるのではないかと考えています。このような取り組みも、やはり規模が小さいからこそできることだと思います。そして、学生を支えるのは何も先生や大学だけではありません。やはり地域社会にも一緒に支えてもらうことが不可欠だと思います。そういう意味で和歌山はとても良いところです。人情あふれる人や組織がたくさんあります。まさに大学を始め地域社会全体で学生が支えられている、つまり地域に支えられる大学だということが反映されていると思います。これこそが「地方大学モデル」ではないかと私は思います。

地方大学モデルとは

— **地域社会との具体的な接点や活動などがあるのでしょうか。**

山本 例えば、教育学部では通常教育実習を附属校等で行いますが、オプションとして僻地での教育実習を実施しています。これは和歌山県教育委員会と協力して行っているのですが、単に田舎にある学校で教育実習をするというだけではなく、学生には田舎の家にホームステイや合宿をしてもらっています。普段まず触れ合うことのないお爺さんやお婆さんとの会話など、本当にごまかしの利かない人との触れ合いを通して今までにない経験を積むことができると思います。

ここ数年、「構造改革」という言葉がよく叫ばれますが、教育面から見ると日本社会の構造改革の結果、これまでの人間関係がつぶされてしまったのだと思います。競争と自己責任は人をつぶすことはあっても、残念ながら「ヒト」を「人間」へ成長させることはできません。住宅政策にしてみても、コミュニティーを前提にした、或いはそ

れを意識付けるようなことも含めた住宅政策でなければいけません。しかし、現在は核家族化が進み、家族ですらばらばらになり、人と人が出会わない地域社会になってしまいました。やはり、地域に依存するというか、大学がプロデュースして学生たちを地域ぐるみで育てる仕組みを作ることが重要だと思います。



一 不均等発展における和歌山についてはどのように思われますか。

山本 和歌山の地の利の悪さというか、経済が遅れ、辛酸を嘗めていますね。当たり前ですが、経済効率からすれば企業が和歌山に来る理由はないかも知れません。しかし、企業が来ないから和歌山という地域に意味がないのかといえば、そうは思いません。

国家の形成について考えてみると、富を再配分するために国家を形成しているのであって、一極集中のために国家を形成してはいません。また、都会に人材が多いのではなく、地方からたくさんの人材が輩出されています。つまり、先ほどの話ではありませんが、私はいい人間は地方、和歌山でこそ育つと思っています。確かに都会では断片的な能力が身に着くシステムは整備されているかもしれませんが、トータルな人間が育つようなシステムにはなっていないと思います。ですから、いい日本社会を作るために、いい人間が育つ和歌山に富を再配分してもらおう哲学がないといけません。そういうことを和歌山大学が発信

していく必要があると考えています。

私が和歌山大学岸和田サテライトを含むサテライト部長だったときからの考えですが、南大阪から和歌山県全体を和歌山大学の基盤圏域と捉えています。和歌山だけに限定せず堺以南まで広げると、人口規模としてはかなり大きなエリアになります。実際、南大阪から来る学生の数が多いですし、先生方の居住地も南大阪が多いので、南大阪から和歌山が和歌山大学の基盤圏域というふうに考えることが妥当だと思います。堺には大阪府立大学もありますが、大阪府立大学とも協力しつつ、和歌山大学は国立大学としてその中でも大きな役割を果たせることができると思います。それがひいては「地方大学モデル」になるのではないかと思います。人間を育てる仕組みとして、地方は最も重要ですし、地方という地盤の中で青年を育てるのもまた地方大学モデルだと考えています。

一 地域との連携という話がありましたが、今後、産・学・官も含めた連携についてどのようにお考えですか。

山本 先ほどもお話しましたが、和歌山大学の4つの学部では、人間と経済と技術と生活スタイルを学ぶことができ、大学として必要な基本的な学部がそろっているといえます。また本学を取り巻く環境を見てみると、宗教は高野山大学がありますし、医学は和歌山県立医科大学があります。トータルで見ると、日本の総合大学が持っているものは大体そろっていることになります。その中で和歌山大学は国立大学として最大の陣容をもって、連携の中心としての役割を担っていきたいと考えています。

私は10年間、生涯学習教育研究センターで地域と大学をどう結び付けるかという研究をしてきました。大学の先生というのは、大学のそれぞれの事情、特殊な事情を抱えています。恐らく他の

組織にはない性格があると思います。具体的にいうと、研究者はみんなある意味勝手な人だということです。つまり、好奇心にあふれ、自分の夢をただひたすら追える人でなければ研究者としては通用しない世界だということです。だから、先生の多様性を研究者同士だけでなく、社会全体も含め認め合う必要があると思います。だからこそ、産・学・官の協力のためには、お互いの相互認識を作ることがまず重要だと思っています。と同時に、本学には先生が300人余りいますが、300人が全員、産・官にコミットする必要はないと思います。先生方が本当に自分のテーマを追求していく中で、結果的に産・官とコミットすることができればよく、そういう先生を大学側がサポートすればいいのではないかと思います。ただコミットできなかった場合には、本学の繋がりを生かして、学会関係者やいろいろなチャンネルを使ったネットワークの中でコミットしてもらえる方のプロデュースを、国立大学の責任としてするべきだと思っています。さらに、このプロデュースをより円滑に進めるために、生涯学習教育研究センターや地域共同研究センターなどが、本学の学部を超えた横断的な研究者を組織し社会とフィッティングさせるプロデュース機関としての役割を担ってほしいと思っています。

そして、何より和歌山にコミットしてもいいという気持ちを先生方にもってもらわないといけません。そのためには地域の人たちの励ましがとても大切ですし、お互いにコミュニケーションを円滑にしていかなければ成り立ちません。大学側も社会「貢献」という考え方ではなくて、むしろ大学も地域に参加するという気持ちを持つことが大切だと思います。先生たちにも今の時代を生きる一人の人間として、研究者として、現代の問題の解決に参加するという気持ちをもって欲しいと思います。

私自身は経営者として、産業界や官界に大学とはこういうものだという理解をもらうよ

うに活動する責任があると考えています。何と言っても今すぐ役に立つ研究をしている人もいれば、100年後に意味がある研究をしている人もいるわけですから、全てにおいてすぐに役立つものばかりを大学に求められると対応できません。そこで、経済界の方に大学の実状を理解してもらい、それを経済界に発信してもらうために関西経済同友会の常任幹事を理事に迎えました。これからの大学と経済界の関係がより密接になり、協力して取り組みやすくなると思います。

－ 最後になりますが、学長としての思いや決意などがあれば、ぜひお聞かせください。

山本 大学が国立大学法人になり、学長自身が大学経営を行わなければならなくなりました。私もそうですが、大学の先生は非常に偏った興味で人生を過ごしてきた人たちです。当然、組織のマネージャーとしてのトレーニングを積んできたわけではありません。そういう人に経営を委ねるのは実はとても危ういものだと私は思っています。ですから、理事には大学だけしか知らない人ではなく、これまで自治体や企業の経営に携わってきた方々にお願いしました。理事にはこれまでの様々な経験を生かして、研究者が指揮する経営の危うさを穴埋めしてほしいと願っています。私への批判も含め、活発な議論を積み重ね、集団的な経営をしていきたいと思っています。とにかく学長や理事が最先端に出て行って、実情をつかんだ経営をし、最後の責任は私自身が取るという覚悟をもって取り組んでいきたいと決意しています。

－ 本日はご多忙なか、長時間にわたり貴重なお話を賜り、本当にありがとうございました。今後ともますますご活躍されますよう、心よりお祈り申し上げます。（敬称略）